

股関節周囲の痛みで鑑別を要した成長期ラグビー選手の2例

○阿部 真行(あべ まさゆき) (MD)¹⁾, 米田 稔 (MD)¹⁾, 山村 在慶 (MD)²⁾

¹⁾ 大阪厚生年金病院 スポーツ医学科

²⁾ 大阪厚生年金病院 整形外科

成長期ラグビー選手の骨盤に生じた比較的稀な骨髄炎の2例を経験したので報告する。

【症例 1】

14歳男児。部活でラグビーをしている。1週前に39度の発熱と左鼠径部痛を生じ、近医で抗生剤を処方されたが痛みが増悪、歩行不能になり来院。体温37.6度、両下肢に擦過創、左鼠径部に強い圧痛を認め、CRP 2.43、WBC 16900であった。化膿性股関節炎が疑われたが、MRIで関節内に炎症所見はなく、左恥骨に輝度変化を認めた。

【症例 2】

13歳男児。部活でラグビーをしている。右殿部痛、右大腿部痛のため歩行困難となり同日紹介受診。アトピーの既往があり、両側前腕、手に膿痂疹を認めた。体温39度、右股関節の他動運動で強い疼痛と右仙腸関節部に圧痛を認め、CRP 1.48、WBC 12100であった。MRIで右仙骨と右腸骨に輝度変化を認め、骨シンチグラムで同部に集積を認め、仙腸関節炎と鑑別を要した。

【経 過】

2例とも血液培養は陰性であった。それぞれ骨髄炎を疑い、入院による安静と抗生剤の投与を行い症状は軽快した。

【考 察】

成長期の骨盤に骨髄炎を生じた報告は稀である。血液培養は陰性だが、2例とも体表に創を認めた。皮膚感染が原因となった可能性や微小な外傷を生じやすいコンタクトスポーツとの関連性は否定できない。成長期の骨盤にはスポーツに伴いさまざまな傷害が起こりやすいが、このような炎症性疾患も含めて鑑別を行う必要がある。